

オリサストロビン粒剤の本田施用によるイネいもち病防除効果		
[要約] オリサストロビン粒剤（本田湛水散布）は、6月下旬の葉いもち初発生時期に施用しても防除効果が持続し、従来の剤に比較して穂いもち防除効果が高い。		
農業総合センター農業研究所	成果区分	技術情報

1. 背景・ねらい

いもち病は本県で最も問題となる水稻病害であり、平成5年、15年の冷害年には本病が多発し、収量および品質の低下を招いた。いもち病を効果的に防除するため、新規に登録された本田施用粒剤の防除効果を明らかにする。

2. 成果の内容・特徴

1) オリサストロビン粒剤（嵐粒剤）を葉いもち初発生時期に湛水散布すると葉いもちの進展を抑制し、従来の粒剤に比べて上位葉での発病も少ない。また、出穂期の2～3週間前（葉いもちの発病最盛期、7月中旬～下旬）に散布しても、葉いもちの上位葉での発病を抑制する（表1、2）。

2) オリサストロビン粒剤の葉いもち初発生時期および出穂期の2～3週間前の湛水散布は、従来の粒剤に比べて穂いもちの発生が少ない。このため、いもち病の発生しやすい条件下においても安定した収量が得られる（表3、4）。

3) 穂いもちに対するオリサストロビン粒剤の湛水散布の防除効果は、トリシクラゾール・フェリムゾン水和剤の出穂期散布およびオリサストロビン粒剤（育苗箱施用専用剤、殺虫剤との混合剤）の移植期施用と同等である（表4）。

3. 成果の活用面・留意点

1) いもち病に対する育苗箱施薬を行わなかった水田において、葉いもちが多発生した場合に本剤を使用すると効果的な防除が行える。

2) 本成果のオリサストロビン粒剤は本田用の単剤である。殺虫剤との混合剤で市販されている育苗箱施用薬剤とは区別して使用する。

3) 連用により薬剤耐性菌が発生する恐れがあるので、オリサストロビン剤の使用は1作1回が望ましい。また、本剤を使用した場合には、同系統の薬剤（アゾキシストロビン、メトミノストロビン）を本田で使用しない。

4) 本剤は、紋枯病に対しても登録がある。

5) 本成果に記載された薬剤は、イネのいもち病に対して登録がある（平成21年2月1日現在）。

4. 具体的データ

表1 オリサストロピン粒剤の本田施用による葉いもち防除効果（平成19年）

供試薬剤	散布日	施用量 / 10a	葉いもち発病度			止葉の発病 葉数 / 10株
			7/10	7/20	8/16	
オリサストロピン粒剤	6月26日	3 kg	22.5	23.1	21.9	8.5
オリサストロピン粒剤	7月20日	2	26.9	36.9	25.0	7.5
プロベナゾール粒剤	6月26日	4	14.4	15.0	22.5	16.5
プロベナゾール粒剤	7月20日	4	25.0	27.5	25.0	11.5
無処理	-	-	25.6	31.9	25.0	34.5

注) 品種：コシヒカリ、移植日：5月11日、出穂期：8月9日、いもち病の発生を促すため基肥窒素量10kg / 10aの多肥条件下（追肥無し）で試験を行った。また、移植当日にクロチアニジン粒剤（育苗箱施薬殺虫剤）を施用した。

葉いもち発病度 = (4A + 3B + 2C + D) / 4 × 調査株数 × 100

A：下葉は枯死し、ずりこみ症状を呈する株数。B：かなり病斑が見られ軽いずりこみ症状を呈する株数。

C：病斑がかなり見られる株数。D：病斑がわずかに見られる株数。

表2 オリサストロピン粒剤の本田施用による葉いもち防除効果（平成20年）

供試薬剤	散布日	施用量 / 10a	葉いもち発病度		
			6/30	7/10	7/23
オリサストロピン粒剤	6月30日	3 kg	0.5	5.5	17.5
オリサストロピン粒剤	7月23日	2	0.5	23.0	26.5
ピロキロン粒剤5	6月30日	3	0	4.0	25.0
ピロキロン粒剤5	7月23日	3	0	23.0	25.0
無処理	-	-	0	22.5	25.0

注) 品種：コシヒカリ、移植日：5月14日、出穂期：8月6日、いもち病の発生を促すため基肥窒素量10kg / 10aの多肥条件下（追肥無し）で試験を行った。また、移植当日にクロチアニジン粒剤（育苗箱施薬殺虫剤）を施用した。

表3 オリサストロピン粒剤の本田施用による穂いもち防除効果と収量（平成19年）

供試薬剤	散布日	程度別発病穂率 (%)				発病度	収量比
		A	B	C	計		
オリサストロピン粒剤	6月26日	0.5	0	1.8	2.2	0.9	158
オリサストロピン粒剤	7月20日	0.2	1.3	2.8	4.3	1.8	153
プロベナゾール粒剤	6月26日	1.1	1.6	15.6	18.2	6.1	121
プロベナゾール粒剤	7月20日	0.7	0.9	13.2	14.7	4.7	135
無処理	-	2.4	2.0	21.9	26.2	9.4	100

注) 試験区は表1と同じ

穂いもちの発病程度と発病度

A：穂首、みご等が発病し白穂となった穂。B：初穂の1 / 3以上が枯死した穂。C：3粒～1 / 3が枯死した穂。

発病度 = 1.00 × Aの穂率 + 0.66 × Bの穂率 + 0.26 × Cの穂率

収量比：無処理の収量を100とした時の割合

表4 オリサストロピン粒剤の本田施用による穂いもち防除効果と収量（平成20年）

供試薬剤	散布日	程度別発病穂率 (%)				発病度	収量比
		A	B	C	計		
オリサストロピン粒剤	6月30日	0.1	0.2	1.7	2.0	0.7	132
オリサストロピン粒剤	7月23日	0.1	0.2	3.5	3.8	1.2	126
ピロキロン粒剤	6月30日	0.8	1.1	8.5	10.3	3.7	124
ピロキロン粒剤	7月23日	0.7	1.5	8.9	11.1	3.9	121
トリシクラゾール・フェリムゾン水和剤	8月4日	0	0.2	4.5	4.7	1.3	119
オリサストロピン粒剤	育苗箱施薬	0.1	0.2	1.4	1.8	0.6	124
無処理	-	0.7	2.4	16.7	19.8	6.6	100

注) 試験区は表2と同じ

トリシクラゾール・フェリムゾン水和剤（フロアブル）は、1,000倍希釈液を150 / 10a散布した。

オリサストロピン粒剤（育苗箱施薬、50g / 箱）は、クロチアニジン・オリサストロピン粒剤を移植当日に施用した。

5. 試験課題名・試験期間・担当研究室

水稲病害虫の発生に応じた地域対応型防除体系の確立・平成19～21年・病虫研究室